

『石に刻まれた千歳の歴史』から

手塚 賢

千歳文化財保護協会事務局長

はじめに

千歳文化財保護協会は平成二十一年、二十二年度の二カ年にわたって千歳市との協働事業として市内の石碑、石像などの調査を行い、その結果を報告書『石に刻まれた千歳の歴史』にまとめ、「市内石碑・石像ガイドマップ」とともに二十三年三月に発刊した。

提出した実施記録書には二カ年間の調査回数二四回、参加人数延一六〇名、車両走行距離八五〇キロとしたが、市全域をくまなく巡って調べなければどの思いから実際には調査回数と走行距離はその数倍に及び、千歳というマチとそれを取り巻く自然環境の豊かさ、多様性を改めて実感できたことは望外の収穫であった。

書題は『石に刻まれた千歳の歴史』とした。石材以外にも千歳の歴史を記すさまざまなモニメントがあり、それぞれに千歳の歩みを物語る貴重な史料



写真1 『石に刻まれた千歳の歴史』と「市内石碑・石像ガイドマップ」(平成23年3月発刊)

であることから、それらも取り上げ一〇四基を報告書に採録した。

特に馬追丘陵を挟んで東側と西側に広がる田や畑、畜舎、牧草地などののびやかな景観は、明治初期、厳しい環境の中に身を投じた先人たちの描いた開拓の夢が具現化された農耕牧畜の原風景を見る思いがする。

調査した多くの石碑の中から特に印象深いいくつかの石碑を手掛かりに、戦後復興期から高度成長期にかけての千歳の様子を訪ねてみたい。

昭和三十年代の半ば過ぎ、定山溪鉄道が豊平で国道36号を横切っていた頃、定鉄豊平駅そばの踏切に設置されていた信号機を過ぎると、恵庭市街に入って恵庭駅前通りとの交差点まで信号機はなかった。その次の信号機が千歳駅前通りとの交差点だったと思う。長都川^{おきつがわ}を越えて坂を上り上長都の台地に出て直線道路を走るバスの車窓からは広大な農耕地と点在する農家や畜舎など一見のどかな風景の広がりが見え、右手にひととき自立した建物が千歳少年院であることを後に知った。

今、折にふれてこの道を往来する時、平坦な地形であることを除けば車の窓からの眺めに往時の面影はない。この地域が戦後開拓の地と知り、その労苦を聞き及ぶにつけても、その変貌ぶりに目を見張るばかりである。

長都地区の戦後開拓と都市化の波にのまれたことを告げる三つの碑、さらに市街地とモラップにある昭和天皇、香淳皇后（昭和天皇御夫妻）に関わる二つの碑の建立された経過などから当時の千歳の様子をみよう。

長都開拓記念碑

戦後開拓の諸相 開拓二五周年を記念して昭和四十六年十二月十一日、北信濃コミュニティセンター隣接地の開拓記念公園に建立された「長都開拓記念碑」の背面には建立の趣意が刻まれており次のような記述が見える。

この地の開拓は 第二次世界大戦の末期昭和二十年に 食糧増産緊急開拓者とし

静岡秋田両県から戦災者が 更に終戦の翌年には長野県から満州開拓経験者多数が入植したのに始まる 入地した農家一八〇戸は言語に絶する困苦に耐えながら火山灰地を反転客土という わが国初めての方法で土地改良を進め 全域の耕地化と生産に大きな足跡を残した

ここに開拓二十五年 その労苦をしのぶとともに残された多くの功績を讃え長く後世に伝えるため開拓碑を建立する

趣意には入植地の自衛隊演習場、市営工業団地、住宅地への転用などを述べ、結びとして多くの功績を伝承するといった自負の念が込められ、台座背面には一八八名の氏名が三段にわたって刻まれている。

長都地区への入植とその後の開拓に中心的な役割を果たした長野開拓団について『砂礫を耕す』は次のように記す。

昭和二十一年、先遣隊として二十戸が長都地区に入植、後統部隊の受け入れ準備をする。翌二十二年に後統団が入植。三月十六日、十六戸が本隊の先遣隊として到着。四月二十日、本隊の三十五戸が到着し合計七十二戸が入植した（年表では七十二戸とあるが、到着入地した者のうち八戸が他地区へ転出したため入植者として扱うのは七十二戸）。

昭和二十八年九月、組合の電化事業への補助を求めて長野県知事に提出した陳情書末尾の連署者が七十一戸であることから、当初入植者は少なくともこの年までは揃って就農していたことがわかる。

入植が組織的計画的であったから、当然開拓地内においては中心的な地位



写真2 長都開拓記念碑
(昭和46年12月11日建立)

を占め、開拓農協の運営等にも常に長野団員が主導的役割を演じた。この間のことについて『千歳市史』は次のように記している。

昭和二十一年・・・この年緊急開拓はこれまでの戦災帰農者ではなく、外地引揚者、復員者三男二〇〇戸と、長野県からの一〇〇戸の割当があり、これら一連の開拓者のための専任職員三名が配置された。・・・年度中に入植者は近唐国有林内四戸と、長都地区の二〇戸だけであった。

二十二年には長野県の七四戸（三十八年発行の『石狩開拓のあゆみ』には『二十一年にはさらに上長都地区に長野県送り出しの満州開拓経験者七十一戸が入植』とある）と道内及び戦後隊の三七戸が長都の民有林に、その他上新嶮淵の民有林に三戸近唐の国有林に二戸、合計一二五戸が入植した。

昭和二十一年から二十三年まで入植状況については、長都地区・入植戸数一五一・作付面積一六〇町三五〇・開墾面積九〇町七七〇と別表にあり、全地区の入植戸数二〇〇とある。また、二十三年度に入植した祝梅地区の開拓実験農場という言葉も興味深い。

緊急入植によって、二年間に一五一戸も増加した長都地区では、子弟を就学させる小学校の必要に迫られた。これによって建設されたのが千歳第三小学校で現在のキリンビール千歳工場のビアパークとなっている。さらに、開拓産婆として助産婦を発令したりしたという。

このようにしてスタートした千歳における戦後開拓を、その始期から終末までについて『砂礫を耕す』は年代史的に次のように概観している。

- 経済混乱期 昭和二十四年 入植の開始と自給自足の農業
- 経済復興期 昭和三十五年 定着営農の進展と販売作物への移行
- 高度成長期 昭和四十三年 岐路に立つ開拓、迫り来る都市化の波
- 開拓収束期 昭和五十年 大規模経営指向と都市化農業への模索
- 一般農政移行期 昭和五十一年

なお、碑が北信濃・上長都地区に所在するにもかかわらず「長都開拓記念碑」と刻まれているのは、鉄道以西の北信濃、上長都の字名は昭和二十六年に制定されたもので、それ以前は鉄道以東の都、釜加を含めて大字で長都と呼ばれ、入植当時は一般的に長都開拓と呼ばれていたことにある（長都は大正四年まで「村」）。台座背面の一八八名は駒里と祝梅を除いた地区の千歳市開拓農業協同組合（開協）の組合員である。

開墾の頃 『砂礫に耕す』に桜木在住の西澤久が寄稿した「回顧三十年」と題された一文がある。西澤は入植時十三歳であった。母、妹の三人で上長都地区（現第三工業団地）に入植した一家の開拓の顛末を要約し、開拓二五年の軌跡をたどってみよう（敬称略）。

昭和二十二年四月十五日、桜を見て長野を出発、十七日の朝は苗穂駅の列車の中で迎え、そこから各駅停車で一時間ほど、前途の厳しさを暗示するかのよう

に霽降る肌寒い千歳の地におり立った。
現在の千代田町四丁目付近の旧海軍のバラック宿舎の一〇畳程の部屋で伯父家族と一四人の生活を始め、配当地に入り開墾にかかったのが五月八日。そこは薪炭業者が炭を焼いた跡地だった。

北国の限られた作付けの適期に追われるように、炭用材を伐り出したあとの残り枝などを焼き払い、木株のない所を選んで芋を植え、また、焼き払ったあと灰の冷えるのを待つてイナキビ、ヒエ、アワの種子をバラ播きし木の枝を束ねた等で掻き混ぜる簡易な作付けで何とか適期に間に合わせ、自給自足の開拓生活をスタートさせた。

開墾作業の道具は島田鋤と抜根専用の鋤だけ。テコ棒の利用など創意工夫を重ねながら抜根作業を続ける日々売って金に換える産物もなく、炭焼きの手伝いをしての日当、年度末に支払われる開墾補助金が現金収入の拠り所だった開拓初期の生活。

二十三年、抜根機が登場。豊平式抜根機を使いかなり大きな根株を抜くことが出来るようになるが、抜根機の重さが八〇キ位あるのが難点で母と二人で漸く動かしたことも。毎日うす暗くなるまでの作業が続くが、僅かずつではあるが畑が広くなつていく、その喜びと嬉しさが支えとなり苦しい作業も毎日続けることができた。

開墾を業とする人に委託したり、農作業の合間に開墾作業を続け、二十七年、組合がブルドーザーを導入し機械開墾が始まるまでに約四町歩を開墾。その後の機械開墾により抜根が完全となり農作業の効率も上がって、入植以来十年で本地七町歩の開墾を完了した。

遡って、二十三年三月、諸先輩とともに開協の創設に二六六名が参加（H21解散）。この年六月一日、千歳第三小学校が開校。

二十八年十一月、待望久しい電灯が灯り、三十年には有線放送が設置された。二十八から三十七年までの間、土壌改良の新兵器マンモスプラウによる反転客土が国の事業で実施され、家畜導入による堆厩肥施用ともあわせ土地の生産力が高まっていく。

酪農への道 二十三年、ウサギ数羽、鶏十羽から始めた家畜飼養、この秋、子豚一頭を買い入れるが粗末な豚舎と飼料の悪さから肥育がうまくいかず欠損を出す。

以後、鶏の増羽を進め貴重な収入源とする。米一俵が三千円の頃で卵一個が二〇〜三〇円、小遣い代わりに卵五個をもらって出かけて金に換え、映画を見て他に何か食物が買えたほどで鶏に力を入れたのも当然だった。

二十四年秋、馬を購入。人なつこく農作業が上手で手綱なしでプラウかけができた。馬を使うのは初めてだったが、いろいろと馬に教えられた。

二十六年七月、貸付国有牛の順番がきて待望久しかった乳牛をやっと手にすることができた。二十八年一月最初の分娩は残念ながら牡だったが、最盛期に

は三千キも搾乳できるほど能力の高い牛で、牛乳全量をビンに詰め、自転車で宅配した。この牛のお蔭で生活にも潤いができた。

ところが二十九年、二産目の受胎ができず精密検査の結果、卵管閉塞のことで廃牛処分と決まり涙をのんだ。この失敗を教訓に近隣の牛舎の見学や専門書による飼養管理を学ぶ。

先進牛舎の見学の際知った血統選択の重要性をふまえ、家畜資金と自己資金で酪農の本場遠浅から二頭を買い入れて再出発を図る。しかし産乳能力はまずまずだが牝に恵まれず頭数が増えない。やむなく中小家畜に頼らざるをえなかった。

三十年、作付けした小豆一町五反歩が天候に恵まれて豊作。まとまった収入を得て翌三十一年、近所の人々の応援のもとブロック造り四〇坪の畜舎を建築。小豆一町五反歩で畜舎が建つなど今では考えられないことだった。

暖かな畜舎と自衛隊の残飯を入手できたことで、前とは異なり豚の肥育も良く、千葉県から導入した種豚繁殖を併せて三十一年は豚での収入が大きく伸びた。この年、仔返し牛の貸付を受け三頭となり豚、鶏と合わせて畜舎もにぎやかになってきた。

三十二年、S氏をリーダーに同志六名で乳牛経済検定組合を結成。その動機は火山礫地での農業経営を酪農に求めながら、牛の飼養技術の未熟さから経営安定どころか負債の増加が目立つことから経済動物としての牛の飼い方を知らなければとの考えによるものであった。

活動は地味だったが年々内容を充実させ、試験圃場での品種試験、施肥試験、個体能力の記録、飼料計算に基づく飼養管理、共励会や研修会の実施等を通じて組合員相互の親睦を図りながら乳牛飼養技術の修得、向上に励む。

四十三年にはその成果が認められ、この乳牛組合が準酪農北海道一の栄誉に輝く。この乳検活動は組合員のみならず地域の牛屋にも良い刺激を与え、酪農

振興に大きく寄与した。

三十年代は施設整備の期間で毎年コンクリート仕事をし、畜舎や付属施設を建設、四十年に一応の形が整った。農作業も重作業は組合のトラクターに委託し、軽作業のみ畜力で行うようになり労働も軽減された。

以上のような西澤の酪農経営基盤の整備、確立の過程には開協との緊密な連携によるたゆまざる研鑽と尽力があったことがうかがわれる。

三十四年に祝梅地区、三十五年には駒里地区との合併で開協の正組合員数は一九〇名となっていた。

酪農経営の確立、そして終末 四〇年代に入り漸く経営も安定してきたが、国の高度経済成長政策の影響を受け経営規模の拡大が叫ばれるようになった。

反転客土や土壌改良材の投入、家畜の増殖、堆厩肥の施用によって地力も高まり生産物も増えたが、なお規模拡大の必要に迫られ未墾地の開墾を進めて四十二年に完了。隣の離農地一町歩と借入地一町を合わせ計一二町歩の耕作地となり酪農経営基盤が確立した。

開協内に千石会ができて出荷乳量の番付を競い合い、乳検組合員が上位を占めるなど乳検組合活動の成果があらわれて気をよくしたのもこの頃であった。

共進会に出陳し長都開拓地区で最優秀を三回、市の共進会で最優秀一頭、優秀一頭を受賞できたのはとても嬉しかった。これも系統選択の重要性を教えたくれた諸先輩のお蔭と感謝する。

しかし四十六年、第三工業団地用地買収により酪農を断念せざるを得ず牛を手放すとともに長都開拓記念碑の建立に関わることになる。翌四十七年七月、現在地に居を構えることになった。

西澤一家が二五年にわたって額に汗し苦勞の末に築き上げた酪農業土は今、地元を代表する企業D社の所有地となって新たな役割を果たしている。

多くのスペースを割いて細々したことまで記述したのは、国の政策に基づい

て進められてきた戦後開拓のさまざまな施策が、具体的にどのような形で開拓現場に具現化されたのかを見ておきたいとの意図による。それは開墾補助金、ブルドーザーなどでの機械開墾、貸付国有牛、仔返し牛、家畜資金、反転客土事業などという形で、開墾初期から酪農経営基盤を拡充整備していく過程の折々に、不十分ながらも相応の支援と便宜となつて西澤の営農努力に資するものであつたのではないかと察するからである。

風雪に耐え碑

上長都地区の変貌 工業団地・住宅地へ 地表からの高さ二^五九^〇セ、最大幅二^五〇^セ、堂々たる風格の日高石に「風雪に耐え」と刻んだだけの碑は、開拓地の面影をわずかに残す畑地跡を背景に大地にどつしりと腰を据えるかのような趣で上長都明星公園に建つ。その横に黒御影石製の趣意書碑があり、正面に「第四工業団地土地区画整理事業完成記念」とある。

趣意文の最後は次のように記されている。

昭和二十七年から北千歳駐屯地の開設に伴う開拓地の買収が始まり、昭和二三年には北海道大演習場用地として、

南三三号以南の開拓地が徐々に買収されたのであります。その間、昭和二八年には千歳少年院が開設される等、国道三六号線沿いという好立地条件からそれぞれ時代の要請に応えて来ました。昭和四六年には当市の最初の線引きに際し工業専用地域として市街化



写真3 「風雪に耐え」碑
(平成6年7月建立)

区域に編入されたのでありますが、営農の意欲冷めやらず、近年まで畑地として耕作されて来たところでありますが、平成三年に市の強い要請と地権者の開發合意を見て、市施行による工業団地造成に踏みきつたのであります。此処に事業の完成を記念し、その歴史を後世に残そうとするものです。平成六年七月建

この地域の開拓農耕地とそれを創りあげてきた人々への鎮魂の碑と言えるかもしれない。この碑石背面には第四工業団地区画整理事業の審議委員会として西澤の氏名も刻まれている。

千歳第三小学校跡碑

「みおやたち 部落つくらすと」 教育環境の変遷 高さ一^五二^〇セの御影石製の碑石正面上部に、昭和三十二年撮影の空撮写真を貼付、その下の鉄製銘板に「千歳第三小学校跡碑 開校昭和二十三年六月一日 閉校昭和四十三年七月三十一日 平成七年三月建立 記念碑建立委員会」と記す。市が手掛けた上長都の市営第二工業団地キリンビル千歳工場キリンビアパーク内にある。

背面にはランドセルをイメージしてレンガを貼り付け、そこに校章の下に校歌の歌詞（一〜三番）を焼き付けた陶板がはめ込まれている。作詞者は当時支笏湖小学校の校長であつた歌人の川村濤人（かわむらうじん）、作曲者はこの小学校第三代校長の野々山博とある。

この千歳第三小学校は前述のように、戦中戦後この地域に入植した開拓者の子弟の教育の場として開校したが、一年生から



写真4 千歳第三小学校跡碑
(平成7年3月建立)

四年生までを一教室に收容して行われる授業や諸活動の苦労がしのばれる記述が『千歳市史』にあるので引用する。

(略)二十三年三月に教室一に住宅一棟が完成したので、とりあえず五月に初代校長の発令をみて、六月一日から千歳第三小学校として発足した。低学年だけ単級五四名だけを收容し、五年以上三三名は、千歳小学校に依頼して臨時收容された。通学区域は東九線から西、南二十六号より南とされた。

昭和二十四年一月になって千歳小学校に依頼の四年生以上の学童を收容し、児童数八〇名の全員が顔を揃えて、初めての卒業生一名を送り出した。

昭和二十四年には児童数が一三〇名となった。八月には教室を増築し三学級認可となり、父兄の勤勞奉仕によってグラウンドも造成された。

しかし、火山灰地の開拓の難しさから間もなく離農者が続出し始め、昭和二十五年四月には児童数九二名となつてもとの二学級に逆戻りするが、父兄たちは門柱を建て、庭木の移植や芝生の整地、廻旋塔やブランコ、相撲場の建設など教育環境の整備に懸命の汗を流した。

昭和三十三年十一月、開協と合同の一〇周年記念式典をあげたとき児童数八七名、以後も減少傾向が続き、四十年ごろから北栄小学校のマンモス化と千歳第三小学校の児童減対策として両校の中間地に新設校開設準備を進め、四十三年七月十八日に千歳第三小学校お



写真5 千歳第三小学校跡碑除幕式
(平成7年6月18日撮影 ㊦)

別れの式を行い、二〇年の歴史の幕を閉じた。この時、児童数五九名。この間、西澤の妹も千歳第三小学校に入学し、卒業している。

千歳第三小学校と同じ年に創立された開協の総会は、年々この校舎を会場に行われており、児童数が減少傾向に転じた後にも屋体建築やピアノ購入、テレビなどの視聴覚機材、放送施設などの整備に力が注がれてきたのは、戦前から教育に熱心な地として知られた長野県からの開拓団の、子どもたちに寄せる想いの表れであろう。

母親たちが小麦粉でパンを焼いて、学校給食の先駆をなしたのも千歳第三小学校であるという。

父母も同席して行われる入学式や卒業式など、折にふれて歌われたのが校歌であった。

千歳町立千歳第三小学校 校歌

作詞 川村 濤人

作曲 野々山 博

一、みおやたち 部落つくらすと

つとひきて 心協せつ

石狩の 荒野拓きし

つとめこそ 吾等が使命(御祖等)一番、二番略)

子どもたちへの教えとともに戦後開拓に身を挺した親たち自身の想いが込められているように思われる。

北信濃・長都地区の工業団地の充実と急速な宅地化に伴い、児童数が異常なまでに増加しつつあった北栄小学校の飽和状態を解消するため新設されることになった信濃小学校の発足当時とその後の推移をみてもこの地域の急激な変貌ぶりをうかがうことができる。

市は北栄小学校と千歳第三小学校の中間に信濃小学校を建設中だったが、校



舎が完成しないまま昭和四十三年四月、北栄小学校の一部と千歳第三小学校を仮校舎として授業を開始し、七月二十二日になって北栄小学校七学級と千歳第三小学校三学級を新校舎に迎え、初めて独立した信濃小学校の態勢を整えた。このとき既に児童数五八三名、二四学級となっていた。

信濃小学校は開校後も周辺地域の開発と住宅建設の影響をうけて、年々児童数が増加し二部授業、特別教室の転用などで急場をしのいだが過密状態は続き、昭和五十三年四月、自由ヶ丘に新設開校した桜木小学校に三九八名の児童を移籍し、二二学級で新学期を迎えた。

千歳の戦後開拓には他のどの町村にもない特殊な事情があった。古くは米軍、続いて自衛隊の要請による土地買収があり、昭和四十年代に入ると工業団地、住宅地への転用を迫られ、今まで牛がのどかに草を喰んでいた牧場が一朝にして工場や住宅の屋根に埋もれていくような状況であった。

千歳ほど地理的条件に恵まれた開拓地はなかった。あまりにも条件が良すぎたばかりに、工業化、都市化の波に飲み込まれてしまったといえよう。

千歳第三小学校跡地は市営第二工業団地の一部になったことは先述した。跡地には昭和四十七年にキリンビルが立地、五十年には千歳工場が操業を開始している。キリンビアパーク内にあるゲストホールやレストラン「ハウベ」周辺の木々は元の学校林で、その園路は往時のままであるという。教育環境を整えようとはがんばった父兄の努力を思い出させる森である。

千歳第三小学校跡地の建立に当たっては、平成三年十二月に長都地区発展期成会が千歳市に千歳第三小学校跡地に永久的標識物建造の陳情をなしたことが発端である。これを受け、六年六月に千歳市は学校跡地記念碑建立に一部補助する交付要綱を制定した。この要綱によって、現在までに旧・千歳第三小学校、今春閉校する真町中学校に記念碑が建立されている。

天皇陛下皇后陛下下行幸啓記念之碑

戦後昭和史の小景 石碑は北栄小学校のグラウンドと国道36号に挟まれた狭い緑地の中、覆いかぶさるように茂るオニコの枝の下に静かにたたずむ。安山岩の碑石正面には、横書きで「昭和二十九年八月二十三日午前十一時五十分 天皇陛下皇后陛下下行幸啓記念之碑 一条實孝謹書」と刻まれているが、「いつ、誰が」建立したものか手がかりとなる刻文は見当たらない。

その手がかりを求めているいろいろな資料にあたる中で、この碑が昭和天皇の戦後全国巡幸に関わる銘記すべき石碑であることを知った。せめて建立時期だけでもと思いいちこちに電話などで問い合わせたり、地元の石材店を回って話を聞いたりしてみたがわからない。

幸い千歳文化財保護協会榊原会長の尽力によって北栄小学校の『学校沿革史』に「昭和三十年十二月十六日 巡幸記念碑完成」とあり、そのあと「高さ一メートル五十、中二メートルのモーターラップ石に」に続き前記碑文が記載されていることが確認できた。しかし、「誰が」建てたのかは不明のまま報告書を出すことになった。石碑調査に関わる心残りの一つである。

昭和天皇の北海道巡幸 この時の北海道巡幸の日程を見ると、昭和二十九年八月六日に那須御用邸を出発、七日に青森港から御召船「洞爺丸（青函連絡船）」で函館に入り、一七日間で函館・大沼・長万部・室蘭・登別・苫小牧・夕張・岩見沢・旭川・上川・北見・美幌・網走・弟子屈・阿寒湖・釧路・帯広・富良野・小樽・ニセコ・札幌・千歳というコースを巡られ、その距離は二、八八四



写真6 天皇陛下皇后陛下下行幸啓記念之碑
(昭和30年12月16日建立)

キに及んだ。

当初、昭和天皇は道内すべてを巡ることを希望されたが、日程の都合により稚内地方と根室地方は外されたという。

この巡幸の終わり八月二十一日、昭和天皇御夫妻はニセコを発ち小樽を経て札幌に入り道庁を訪問された。

二十二日は札幌・円山陸上競技場で開催された第九回国民体育大会開会式で開会の辞を述べられた後、北海道大学において高倉新一郎教授から「松浦武四郎と北海道」、児玉作左衛門教授から「北海道先史時代の遺物」について奏上を受けられている。

そして、翌二十三日この巡幸最終日、最後の視察先である月寒種羊場を視察後、千歳に向かわれ開設間もない北栄小学校のグラウンドに設けられた奉迎場において北海道巡幸の締めくくりとなる最後の奉迎を受けられた。

北海道が発行した『昭和二十九年北海道行幸啓誌』には次のように記録されている。

両陛下は十一時五十分本道における最後の奉迎場千歳町の北栄小学校にお姿をあらわされた。この日基地千歳の弾丸通り市街地は、紅白のまん幕と軒並の日の丸に美しく飾られ、治道は十時頃から早くも歓迎の町民で埋まり早朝から絶え間なく流れる「君が代」はスピーカーに乗って全町をおおい、いつものアメリカ色は一掃されて両陛下下歓迎の一色に塗りつぶされた。早朝から掃き清められた北栄小学校の歓迎場も地元千歳町をはじめ、恵庭・広島・由仁の各代表者などの特別歓迎者一千名に一般歓迎者約一万八千名が一時間位前からつめかいていた。山崎千歳町長のご先導で両陛下が奉迎台上にお立ちになると、「君が代」が高らかにうたわれ渡部町議会議長の万歳主唱で歓迎場は白熱的に湧きたち歓呼の声はしばし鳴りも止まなかった。一方スト中で其の動向を注目されていた全駐労千歳支部でも国民的立場から天皇を歓迎するとの方針から、午前十時半、飛行場への通路になっているキャン

メインゲート前の横隊ピケを縦隊ピケに移行、歓迎体制を整えると共に十一時半には労働歌、激励演説など一切を中止、全駐労千歳支部の染抜き鉢巻きを頭に闘争中の組合員二百名も治道に整列、両陛下を歓迎した。

二十三日、午後零時二十二分、昭和天皇御夫妻は千歳空港から日航ターナー機長以下九名のクルーによる御召機ダグラスDC-6B「トウキョウ」で帰京された。この時が御夫妻にとつての初めての空の旅であった。こうして足かけ八年半、全行程三万三千キロ、総日数一六五日に及ぶ昭和天皇の戦後全国巡幸の旅は終わりを告げた。

したがって、北栄小学校における奉迎とそこに建つ石碑は北海道巡幸の最後を締めくくるだけでなく、昭和二十一年二月に神奈川県から始められた全国を巡る長い旅の最後を跡付ける重要な意義をもつものであるということになる。

因みに『千歳市史』と『増補千歳市史』では、巻末年表の昭和二十九年の項に「(八月二十三日)天皇・皇后両陛下御来町」とあるのみで、この時の奉迎行事やこの石碑についての記述、記録は見当たらない。『増補千歳市史』では年表の次の行の備考欄に「台風十五号で洞爺丸沈没」とあり、御召船となった洞爺丸の最後を伝える。

御言葉、御製にみる北海道巡幸の点景 北海道巡幸に関するエピソードを御

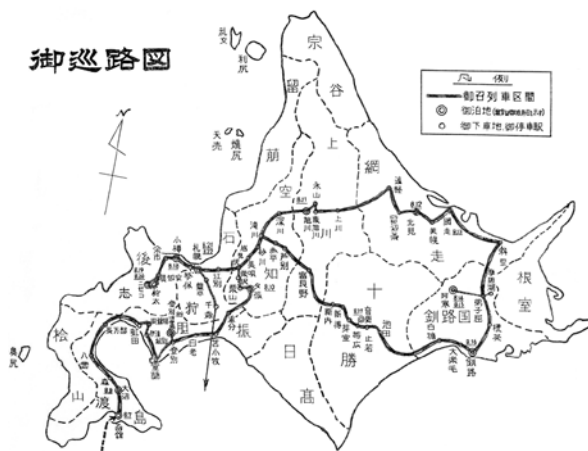


図1 御巡路図(北海道発行『北海道行幸啓誌』から転載)

言葉と御製からみてみたい。

◎「なお、ここに来られない方にも伝えてください（八月十一日）」

旭川の奉迎場では遺族席に足を運ばれて遺族を励まされ、こう結ばれた。

この日、この巡幸のコースから外れた道北の人々で旭川行きの列車は超満員、臨時バスまで出て旭川は一五万人の人数でにぎわったという。

◎「皇后が来られなくて残念でした（八月十四日）」

体調が気遣われた皇后を残し、急遽おひとりでの訪問となった開拓僻地校である弟子屈町立札友内小学校で出迎えのあいさつに応えての御言葉。

低学年を一学級に

まとめた単級複式学

級の理科の授業に半

ば驚異の表情を見せ

ながらも、付近の川

からとってきたカジ

カやメダカ、フナな

どを教材にした素朴

で野趣あふれる授業

にお喜びになり、金

歯をチラリと見せて

微笑されながら熱心

にご覧になったとい

う。

◎「もうパンは飽きた（八月十五日）」

この巡幸で洋食が

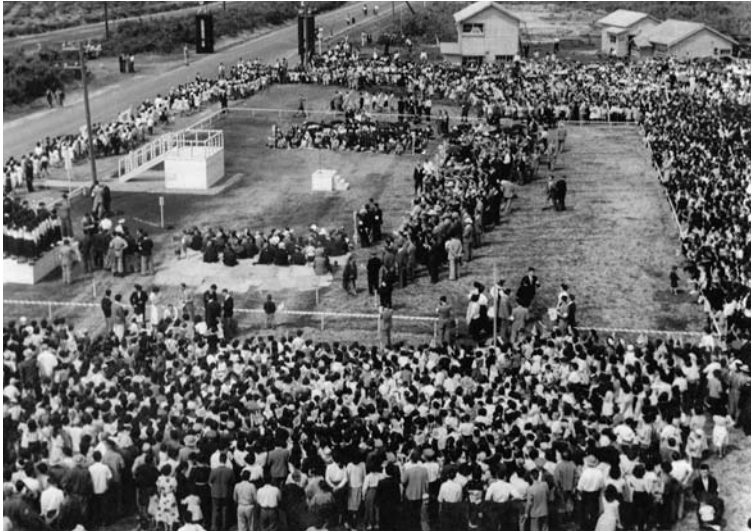


写真7 奉迎会場・北栄小グラウンドに集まった千歳町民（千歳市所蔵）
後方の道路は一級国道36号 お立台の位置に「碑」が建立された

続くのに閉口され漏らされた御言葉といい、この日から和食に改められた。

八月十四日、十五日はホテル阿寒湖荘に連泊、十五日は休息日とされていたが、午後、チュウレイ島でマリモを観察された後、雄阿寒岳登山口とポツケに上陸され植生や泥火山などをご覧になっている（この時点では現在のように八月十五日終戦記念日」という強い意識は官民ともに感じられない）。

◎「ひさかたの雲居貫く蝦夷富士のみえてうれしき空の初旅」

羊蹄山をご覧になる機会は八月九日の洞爺湖見晴台からの展望時と八月十九、二十日のニセコ観光ホテル連泊時の二回あったが、いずれも曇天や雨天のため羊蹄山のすつきりとした山容をご覧になることはできなかった。

◎「松島も地図さながらに見えにけりしづかに移る旅の空より」

高度一万四千フィート、「午後一時半、松島上空を通過・緑の島々が点在する紺青の海のすばらしさを御覧になったあと両陛下はおそろいで操縦室へお越しになり、約五分間説明を聞かれる」、「午後二時五分東京上空へ入り都内を旋回飛行、皇居の上空ではお体をのり出してご自分のお住居を御興味深く御覧になっておられる。午後二時三十分トウキョウ号は滑るように羽田空港の滑走路に入る」とスチュワードスは記している。

◎「このたびは一八年目に北海道に来て各地で熱誠あふれる歓迎をうけ、ことにうれしく感謝にたえない。（中略）顧みれば、昭和二十一年以来全国各地を回り、直接地方の人たちに会い生活の実情に触れ、相ともに励ましあつて国家再建のため尽くしたいと念願してきたが、今回の北海道旅行によって一応その目的を達成出来て満足に思っている」

北海道巡幸を終えられ帰京される前に昭和天皇は全国巡幸についてのご感想をこのように述べられている。沖縄が返還されるのはまだまだ先の昭和四十七年である（『昭和天皇の全国巡幸』『北海道行幸啓史』による）。

戦後全国巡幸の旅 昭和天皇は昭和二十一年一月一日、神格を否定するいわ

ゆる「人間宣言」をされ、新憲法の制定をめぐる慌ただしい動きの中で全国巡幸の旅を始められた。

二月十九日、三台の車列が皇居を出て神奈川県へ向った。沿道の人々はそれが御巡幸の車列とはほとんど気づいていなかったようだという。

全国巡幸は昭和電工川崎工場から始まった。御料車から降りられた昭和天皇は背広にソフト帽という映像などで親しいごく普通の服装で、「人間天皇」として自ら初めて国民の中へ入って行かれた。

この年、十二月までの間に関東・東海地方を巡られた。

昭和二十二年は、六月から十二月にかけて近畿・東北・北陸・中部・中国地方を精力的に巡られている。

八月の東北六県巡幸では宮城県の二泊目の宿泊先に県立古川高等女学校が選ばれた。特別な宿泊施設があるわけでもなく、昭和天皇は板の間に藁を敷いた上に寝られた。山形県では初めて民間営業の村尾旅館に宿泊され、「宿屋というものは、人を泊めるのになんと具合よく出来ているものか」と感心されたという。また、この旅館に歌人の斉藤茂吉と結城哀草果を招いて短歌について歓談されている（八月十六日）。

昭和二十三年は東京裁判の判決が出ることもあり巡幸は控えられた。二十四年は五月から六月にかけて九州全域を、二十五年は三月に四国四県を巡られた。二十六年は十一月に再度京都を中心に近畿地方を回られた。これで青森県から九州までをくまなく巡幸されたことになる。

この後、昭和天皇は早期の北海道巡幸を望まれたが、不安定な社会情勢から治安上の懸念も多く、また津軽海峡を浮遊する機雷の危険性も指摘されるなど前述の時期まで待つしかなかった。

その間、昭和二十七年一月の札幌における白鳥警部射殺事件、五月一日には皇居前広場における「血のメーデー事件」に象徴されるような相次ぐ過激なデ

モのほか大規模なストライキや駐留米軍に関わる問題など、北海道も含めて戦後復興期の年表をにぎわす事件、事故などが相次いでいる。

この時期の千歳の状況について『増補千歳市史』には「昭和二十六年五月、日米講和条約が批准され、朝鮮戦争の勃発により千歳基地駐留の米第一騎兵師団が前線に移動すると、オクラホマ州兵師団が送り込まれ、代わって駐屯した。そのため、いわゆるオクラホマブームが巻き起こり、米兵相手に全国からサービスマンや接客婦らが集まった。また、建築ラッシュとなり、その多くは違法建築で西部劇さながらの歓楽街をつくっていった」とある。『千歳市史』には「昭和二十七年は依然と騒然とした混乱状態はつづき、『西部の街』としての多くの世の非難を一身に集めた感があった」と記し、オクラホマブームが引き起こしたさまざまな難題に直面し苦悩する千歳の姿を暗示している。

昭和二十八年七月、国連軍声明により米軍の撤退が明らかにされると、代わって陸上自衛隊第一特科団の誘致に成功し、自衛隊のマチへの転換を図っていった。

一條實孝公爵 この石碑の碑文を揮毫した一條實孝という人物については「公爵」ということと、次のような略歴のほかはその人となりを知る手がかりは乏しい（『日本人名大辞典』「一條實孝」の項を要約）。

明治十三（一八八〇）年、昭和三十四（一九五九）年。明治、昭和初期の軍人・華族。一條實輝の養子。海軍大学校卒。海軍退役後貴族院議員。昭和二年大正天皇の大喪使祭官長。同三年大日本経国連盟を創設。右翼諸団体の長となり天皇機関説を攻撃。戦時中は大政翼賛会で重要な地位を占めた。

以上のほか、戦後もいくつかの団体の名誉職的な会長として活動していたという。

榊原会長の記憶では「昭和天皇の巡幸前後、時々新保旅館に宿泊される一條らしき人物の姿を見かけた」という言葉からも、この碑を建てるにあたって中

心的な役割を果たした「誰か」は碑文の揮毫者である一條實孝ではないかと思われる。旧華族という身分をおいても経歴等からみて自分なりの歴史観をしつかりと持った人物だったのだろう。

『経済白書』が「もはや戦後ではない」と書いたのは昭和三十一年である。その後、昭和天皇は熱望してやまなかった沖繩行幸への想いを

「思はざる病となりぬ沖繩をたづねて果たさむつとめありしを」と詠みおかれたまま、昭和六十四年一月七日に八七歳で崩御された。

植樹祭記念碑

アカエゾマツの森を見守って半世紀 北海道巡幸から七年後の昭和三十六年五月二十四日、モラップを会場に行われた第二回「植樹行事並びに国土緑化大会（筆者註 昭和四十五年改称「全国植樹祭」）への昭和天皇御夫妻の御臨席を記念するこの碑は植樹祭の翌年、昭和三十七年五月二十四日建立された。

モラップ山の南側の山裾、今はサイクリングロードとなった一般国道276号の旧道から獣害防止柵越しに望む、御影石製の碑石（高さ一丈七尺、上辺幅二丈六尺）正面には万葉仮名交じりの御製のみを刻んでいる。

「御製 人々とあかえぞ松の苗植ゑて緑の森になれと祈りつ」

ちょうど樹齢五〇年を数えるアカエゾマツの林を正面に見守るかのように建つこの碑は、鉄平石張りの基壇の広がりともあわせ、今回調査した石碑の中で最もびやか



写真8 植樹祭記念碑
(昭和37年5月24日建立)

な風格を感じさせる。

この行幸啓について『千歳市史』では写真を含め五〇弱、『増補千歳市史』には同じく二〇強の記述がある。その他の資料も参照し植樹祭前後の様子を見よう。

五月二十四日、モラップの会場では十時三十分から第十二回国土緑化大会が「積雪寒冷地帯の拡大造林と屋敷林の造林」をテーマに開かれ、宣言や決議が採択された後、林業功労者、緑化ポスター入選者の表彰が行われた。

十一時三十分、昭和天皇御夫妻が御料車で会場にご到着、御席までの山道を歩まれる途中で林業功労者にねぎらいの言葉をかけられた。

「植樹行事」は、まず昭和天皇がアカエゾマツの苗三本を「森」の字の形に植えられ、次いで香淳皇后が同様にお手植えされた後、全国から集まった約一万人の一般参会者が三万六千本の苗木を一斉に植樹して終了した。「深いあい色の支笏湖をバックに九・二ハの植樹地はたちまち若い緑の苗木で埋った」と『千歳市史』は北海道新聞の記事を引用して描写する。

昭和六十二年第一回全国育樹祭（野幌森林公園）へのご臨席の途次、当時皇太子殿下同妃殿下であった天皇皇后両陛下がモラップを訪れ昭和天皇御夫妻お手植え樹の枝打ちをされたこと、平成十九年六月に苫小牧市郊外静川の「つた森山林」で行われた第五八回全国植樹祭の会場の用材としてこのモラップの森から伐り出された間伐材が活用されたことが、天皇陛下の御言葉の中で述べ



写真9 天皇陛下お手植の松 皇后陛下お手植の松

られている。

『千歳市史』によれば、この時の奉迎についての注意書きが、昭和三十六年五月五日付『広報ちとせ』に「奉迎は自由意志・服装はふだんのままで」との見出しで五項目にわたって示されており、それに続いて記事は「明治十四年明治天皇の来られたときのように、お顔を拝めば目がつぶれるといつて、通過されるまで顔をあげられず、土下座してお迎えしたときとは、全く雲泥の差と言わなければならない」と記す。七年前の北海道巡幸の際、北栄小学校奉迎場で町民あげての奉迎を行った時の対応はどうだったのか。

昭和天皇御夫妻は、植樹祭前日の五月二十三日十二時五十五分、日本航空の特別機DC-8「宮島」で千歳空港に到着された。御料車は千歳市内を抜け、途中から千歳JAL国際マラソンのルートである新緑の林道に入り一路支笏湖へ向かい、四月三十日に移築したばかりの御泊所となっている王子製紙の倶楽部支笏湖別邸に入られた。この時、道道支笏湖公園線は舗装工事の真最中であった。

空港出発から支笏湖へ向われる昭和天皇御夫妻を奉迎する地元の様子を『千歳市史』は北海道新聞夕刊の記事を引用して次のように記述している。

基地内のお迎えで異彩を放ったのは、米軍家族、アメリカンスクールの子供たちの花やかな歓声と、航空自衛隊第二空団、駐屯米軍の合同儀礼隊、第二空団の儀礼隊は細長い儀礼用のラッパを三本そろえて、御通過と同時に君が代を吹奏、それらが象徴に榮譽礼をおくれば、白い肩章の米軍儀礼隊はアテンション（気をつけ）を号令二下直立不動、ささげつゝ御来道を祝った。

アメリカンスクールの子供達は歓声をあげ、異国の元首に好意の目を輝かせ、涙ぐむ年より達とは対照的だった

市街地からちよつとはつれた蘭越小学校の校庭ではアイヌの人達百人あまりがならんで、山崎校長に引率された同校百十七人の児童といっしょにお待ちしていた。

一ヶ月前から練習をつんで来たという児童たちのハーモニカバンドが、一斉にザクラ、サクラをはじめめる。せいっぱいの表情でハーモニカをふきつづける子供たち、手を振ってお迎えるアイヌの人たち、徐行するお車からにこやかな天皇さまのお顔がうなづかれた

前述した注意書の中に「ご巡幸される二十三日、二十五日、二十七日には、それぞれ国旗を掲げ…」とあるのでその間の旅程をたどってみる。

二十五日、昭和天皇御夫妻は支笏湖から千歳市街地を通過して札幌へ向かわれ農林省林業試験場を視察し、午後には昭和天皇は札幌市民会館での日本赤十字社大会御親授式に臨席し、その後札幌グランドホテルに宿泊された。

二十六日は北海道庁訪問後に北大クラーク会館、北大植物園を視察、その後札幌駅から御召列車で栗山駅へ向かわれ王子製紙の栗山林木育種研究所を視察、標本館貴賓室で昼食をとられた。午後二時過ぎに栗山駅から再び御召列車で登別駅へ、登別温泉の登別グランドホテルに宿泊された。

二十七日は御料車で苫小牧へ、苫小牧市立ひまわり保育所と苫小牧工業港を視察され、午後千歳空港から特別機で帰途につかれた。

おわりに

ここまで戦後復興期から高度成長期にかけての上長都の開拓と都市化の波にのまれたことを告げる三つの碑、さらに昭和天皇御夫妻の行幸啓に関わる市街地とモラップの碑についてみてきた。

上長都地区の戦後開拓の終末に深く関わり、千歳の今日の基礎を築いた自衛隊の誘致と工業団地の造成についてその後の動向を概観して終わりたい。

昭和三十三年七月一日に市制施行。この年人口は四八、四四三人に達した。

昭和二十七年に保安隊千歳駐屯地（現在の北千歳）が開設され特科群が来駐、

二十九年には陸上自衛隊第一特科団のほか第一普通科連隊が東千歳駐屯地に
来駐した。第一特科団は三十七年一月に北千歳に移駐、その後に札幌から第七
混成団が来駐してきて、八月に第七師団に改編された。航空自衛隊は三十二年
八月に千歳基地が開設され九月に第二航空団が浜松から来駐、三十四年には飛
行場も米空軍から引き継がれた。

こうして、市民から北部隊、東部隊、二空団と呼ばれる陸空自衛隊の基盤が
整った。

一方、北海道では初めての自治体による工業団地造成は昭和三十九年に北信
濃の市営第一工業団地、四十二年に市営第二工業団地造成の後、開発方式を民
間デベロッパー方式に変え四十六年に第三工業団地を造成、平成四年には市営
第四工業団地が上長都地区に造成された。工場進出の状況を『千歳市史』の年
表は次のように記す。

昭和四十二年 六月・サントリー工場操業開始

九月・日本文化シャッター操業開始

十二月・大阪変圧器工場操業開始

四十三年 一月・フランスベッド工場操業開始 等々

人口は開拓地の放棄と引き換えに、昭和三十三年の市制施行時から十年後の
四十三年には五九、六五八人と大きく飛躍した。

その後、現在まで市内には一〇の工業（※）団地が造成され二四〇を超える
企業が立地、人口は九四、〇〇〇人を超えた。

『石に刻まれた千歳の歴史』を蔵書される方は参照されたい。

長都開拓記念碑・・・・・・・・・・D 03 (P 22)

風雪に耐え碑・・・・・・・・・・D 12 (P 26)

千歳第三小学校跡碑・・・・・・・・・・I 11 (P 47)

天皇陛下皇后陛下行幸啓記念之碑・・・・A 04 (P 10)
植樹祭記念碑・・・・・・・・・・A 05 (P 11)

参考文献・資料等

千歳市／千歳文化財保護協会『石に刻まれた千歳の歴史』平成二十三年

千歳市『千歳市史』昭和四十四年／『増補千歳市史』昭和五十八年

千歳市開拓農業協同組合『砂礫に耕す 千歳開拓四十年の記録』昭和五十九年

北海道『新北海道通史 第九巻資料三』昭和五十五年

西川秀和『昭和天皇の全国巡幸 第一巻全国編』アーカイブス出版 平成二十年

北海道『北海道行幸啓誌』昭和三十二年

上田正昭／西澤潤一／平山郁夫／三浦朱門監修『日本人名大辞典』講談社 平成十三

年

苫小牧市『苫小牧市年表』昭和五十三年

登別町『登別町史』昭和四十二年

栗山町『栗山町史』昭和四十六年

千歳第三小学校同窓会発足準備委員会『千歳第三小学校同窓会名簿 付録・関係年表』

平成六年（所蔵・三溝茂）

林野庁『美しい森林づくりニュース〈No.24〉』平成十九年

ホームページ 北海道水産林務部／千歳市

協力

写真提供、協力、坪井和子（㊦で表示）